生　活　科

かかわりを生かして自らの思いがふくらむ生活科

～愛着をもって追究し，互いの気付きを高め合える授業の構想～

1　研究の経緯と本年度の研究の方向

(1)　研究の経緯

本校では平成10年度から３年間にわたり，「『ゆめ』を大切にしながら自ら考え，共に生きる子供への支援」という研究主題を掲げ研究を進めてきた。これを受けて生活科では「一人一人の『ゆめ』を育む生活科の授業づくり」を研究主題として設定し，新学習指導要領に沿った年間指導計画の作成を始めとして，さまざまな方策や支援の在り方を研究してきた。その結果，

○　自分の思いや願いを深め，広げていくために，学年テーマの設定や大単元による展開，活動の広がりを大切にした単元配列などの年間指導計画の改善を図ったが，有効であった。
○　支援の方向を【もの・ひと・ば】から考えていくことで，子供たちの活動や表現が豊かになってきた。また，教師が活動を多面的に認め，個々に具体的な支援を与えやすくなった。
○　１，２年の共通単元「土はまほうつかい」，「おもいっきりカーニバル」の活動をすることは，１年生が２年生を見て学んだり，２年生が昨年度の経験を生かした工夫を行い，自分の成長に気付いたりする上で有効であった。

などの成果が得られた。

(2)　本年度の研究の方向

本年度の本校研究主題「未来に向かって，自分らしい生き方を考える子供を育てる」を受けて生活科では，子供が様々な対象とのかかわりを自分の生活に生かしていこうとすることが，今まで気付かなかった新たな気付きとの出会いを生み出し，子供たち一人一人の学びを高め，自分らしい生き方を考えていく上で重要な役割を果たすととらえた。また，子供が自分らしい生き方を考えるためには，一人一人の思いをふくらませることが大切であると考えた。そこで生活科の研究主題を「かかわりを生かして自らの思いがふくらむ生活科」と設定した。

そしてこれまでの研究の成果，新学習指導要領改訂の趣旨や今年度の研究主題をもとに目指す子供像を以下のように定めた。

○　活動に愛着をもち，浸りながら自分の思いや願いをさらに広げていくことのできる子供
○　自分の気付きに自信をもち，さらに意欲をもって活動に取り組んでいける子供
○　自分らしさを大切にしながら，他を認め，互いの気付きを広げ高めようとする子供
○　かかわりを通して，自分らしい気付きを獲得していこうとする子供
○　友達とのかかわりを生かして，自分の学びを高めることのできる子供

また，これらを達成するために本年度の副主題を「愛着をもって追究し，互いの気付きを高め合える授業の構想」とし，次の２点について研究を進めてきた。

(1)　自分らしさを発揮し，愛着をもって追究できる単元展開の工夫
(2)　一人一人が気付きを自覚し，互いに広め，高め合える学習活動の工夫

2　研究の内容

(1)　自分らしさを発揮し，愛着をもって追究できる単元展開の工夫

生活科ではこれまで一人一人の体験の中で生まれる子供の気付きや工夫を大切にして単元の展開計画を立ててきた。そしてそれらを通して，体験の中で表出される子供の思いや願いを広げ，深めていくことが生活科の学習に有効であることが分かってきた。

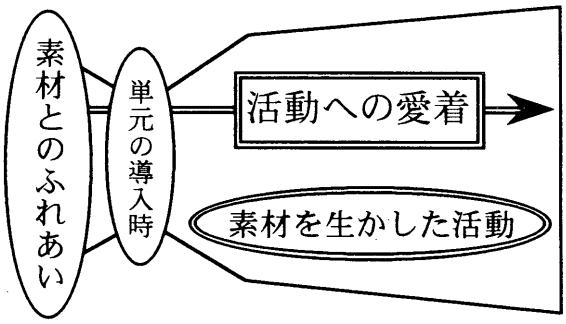
そこで本年度からの３年間は，「愛着」を深めていくことが子供たちの「こだわり」を深めていくことになるとし，「愛着」を今まで行ってきた【もの・ひと・ば】の方向から次のようにとらえた。【もの】何度もそれを使って遊んだり，直したり，改良したりしていくうちに捨てられなくなること，【ひと】一緒に何かを作ったり，遊んだりしていくうちにその人とのかかわりが

より強く，太くなること，【ば】自分で落ち着いて活動したり，遊んだりできる場所。そして子供たちが活動に「愛着」をもって取り組めるよう以下の２点を考えた。

ア　素材とふれあう時間の位置づけ

「愛着」をもって単元展開をするには導入時が重要な役割を担う。昨年度までの研究においても子供の興味・関心を高める単元の導入については，成果を上げつつある。またこれまで，単元と単元の間に散策の時間を設けて次単元の子供の期待を高めてきた。そこで，それらを発展させ，単元の展開に役立つような素材（子供の周囲でかかわる全てのもの，具体的にはその後の単元で役に立ちそうな材料，先行経験として持っておきたいこと，自然，生活環境など）とのふれあいの時間を導入の前の段階に確保することにした。それにより「出会った素材を生かして活動を進めたい」という子供の思いや願いが強くなり，活動も経験に根づいたものとなるため活動への意欲もより強く長期に渡って持続できた。（図１）また，素材とふれあう時間は，活動時間から単元の前に数時間設定することで，必要に応じて年間指導計画の修正を図りながら進めていった。さらに，授業時間外にも各教科や昼休みなどの共遊を通しても素材にふれあえるようにした。

図１　素材とふれあう時間の確保による子供の意欲の高まり



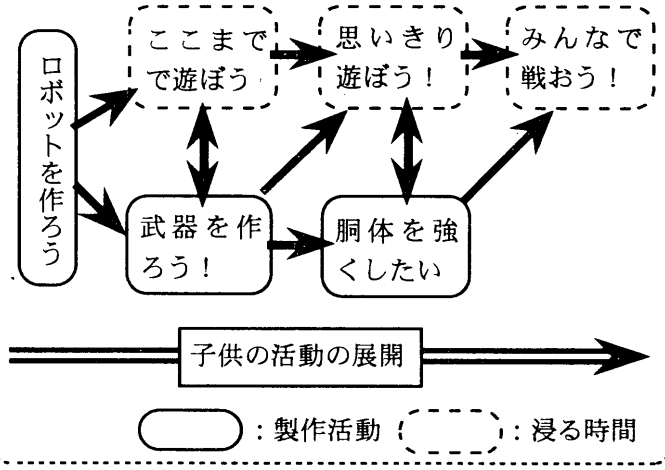
実践例）２年　『ようこそ１年生』

入学したばかりの１年生を迎えて，自分たちにできることを精一杯やってあげようとするこの単元では，子供たちはいくつものグループに分かれてお店を出したり，ゲームコーナーを開いたり，学校や先生のことを教えたりといった活動を考えた。しかし今までの子供たちは歓迎準備が進むうちに，ともすると「１年生のために」という気持ちで取り組んでいたことを忘れ，自分本位な活動になってしまっていた。そこで，１年生は何を楽しみにしていて，どう説明すれば分かるのかなどの観点から実態を把握できるように意図的に素材とのふれ合いの時間（１年生と一緒に遊ぶ時間）を設定した。そのことにより子供たちは，「１年生はクイズを喜ぶ，運動や折り紙が好き，一緒にやるのが好き，じっとしていない」などの実態を知り，自分たちの考えた活動にその結果を生かしていくことができた。

イ　愛着をもち，浸る時間の重視

これまでの生活科の学習では，子供たちの思いや願いを生かして，個人やグループで何かを作る活動が中心であった。子供たちはその中で作っては試し，さらに工夫するという活動を行ってきたが，作ることに一生懸命になるあまり，出来栄えを気にしてしまうことが多く見られた。そこで，製作活動に偏りがちであった子供たちの単元への取り組みを，製作したものを使用したり，楽しんだりする時間（浸る時間）を十分に確保するようにした。そして，その中で友達をはじめとするさまざまな【ひと】との新たな交流をしていくことでさらなる工夫や気付きを生み出したり，単元を通しての満足感や成就感を高めたりできると考えた。（図２）

図２　活動の展開の中での浸る時間の位置付け



実践例）１年　『タイムマシーンに乗って』

26時間に渡る単元展開の中，未来の部屋のロボットグループの子供たちは，ロボット製作を中心に取り組んでいた。そこで，製作途中でも思いきり遊ぶ時間（浸る時間）を意図的に取り入れたところ，子供たちはそれまで製作していた思い思いの武器やパーツを装着し，戦うロボットになりきってごっこ遊びを始めた。それにより，「防御のための武器も考えよう。」「手や足もダンボールで作ろう。」などの新たな発想が生まれたり，「ロボット作りって楽しいな。次の時間はロボットごっこするぞ。」という活動への愛着も深まっていった。

ウ　単元の中での活動への愛着を自覚するためのカードの累積

これまで子供たちは活動を行うごとに『みがくカード』に振り返りを記入してきた。しかし単元に愛着をもち，思いや願いを広げていくことが出来るようにするためには活動後の振り返りだけでなく，最初にもった思いや願いをいつでも見直すことができることが大切と考えた。そこで，単元の概要を知った後，これから取り組んでいく単元に対して，自分の思いや願いを書いたものをファイリングし，常に活動後の振り返りと比較することで思いや願いの成就感を得たり，次の活動に対する意欲の持続を図ったりすることができるようにした。そのために，『みがくカード』は手元に置き，活動を見直したり，思いを発展させたりすることで，活動への愛着を持続させるように利用した。また，それら単元ごとのファイルを２年間分まとめて総合の時間へと引き継ぐことで生活科で培った力を総合の時間へと継続していけるようにした。

(2)　一人一人が気付きを自覚し，互いに広め，高め合える学習活動の工夫

子供は活動の中で無意識のうちに様々なことに気付いていることが多い。そこでそれらを意図的に意識化させていくことが大切と考えた。また，気付いたことをもとにさらに工夫していったり，気付きを裏付けるための自分なりの調べを行ったりすることで，深まりのあるものとすることができるであろう。これらのことから，本校で今まで取り組んできた支援の方向の【ひと】に着目し，かかわりの中でまず一人一人が気付きを自覚できること，さらに互いの気付きを関連づけて考えたり，新たな気付きを獲得したりすることで，高め合うことができるようにする学習活動の工夫を次のように実践していくこととした。

ア　かかわりの中で一人一人が気付きを自覚するための家庭の働きかけやパートナーの在り方

生活科での学習において家庭の果たす役割は大きい。子供は学校で活動したことを家に持ち帰り，喜々として伝えることが多い。また活動によっては，こんなものが必要だとか，こんなふうにしたいといった思いを語ることもある。そこで，今まで発行していた「生活科のお知らせ」の視点を変え，保護者に子供の話を共感的に聞き，賞賛してもらえるような子供との接し方を『生活科だより』を通じて伝えた。そして，振り返りカードや計画表に，生活科の話を聞いたり，子供と話し合ったりして話題となったことを保護者に書いてもらったり，保護者にパートナーとして授業に参加してもらったりすることで，学校と家庭とが共同して授業を展開していけるようにした。ここで言うパートナーとは，従来のサポーター，ゲストティーチャーとしてのかかわりから発展したもので，子供が自分からかかわり，学びを獲得する対象として，活動を共に行っていく者として定義している。具体的には，子供に何かを教えてあげたり，方向性を示したりするのではなく，その行動，姿をもって子供たちが気付いていけるようなかかわり方を追究したい。

実践例）２年『みんなで町を作ろうよ』

長期休業を挟むことにより自分の活動を家族と見直す時間がゆっくりとれると考え，２学期末に『生活科だより』（教師から）や「計画表の持ち帰り」など（子供から）による活動の紹介をした。その結果，３学期の活動に役立ちそうな場所に連れていってもらったり，保護者と話し合う中で，もっと興味のあるものを見つけたりすることができた。また，保護者も子供が自分の活動を何度も伝えることで内容が分かり，興味を持って話し合い，家庭生活から生きたアドバイスを送ることができた。

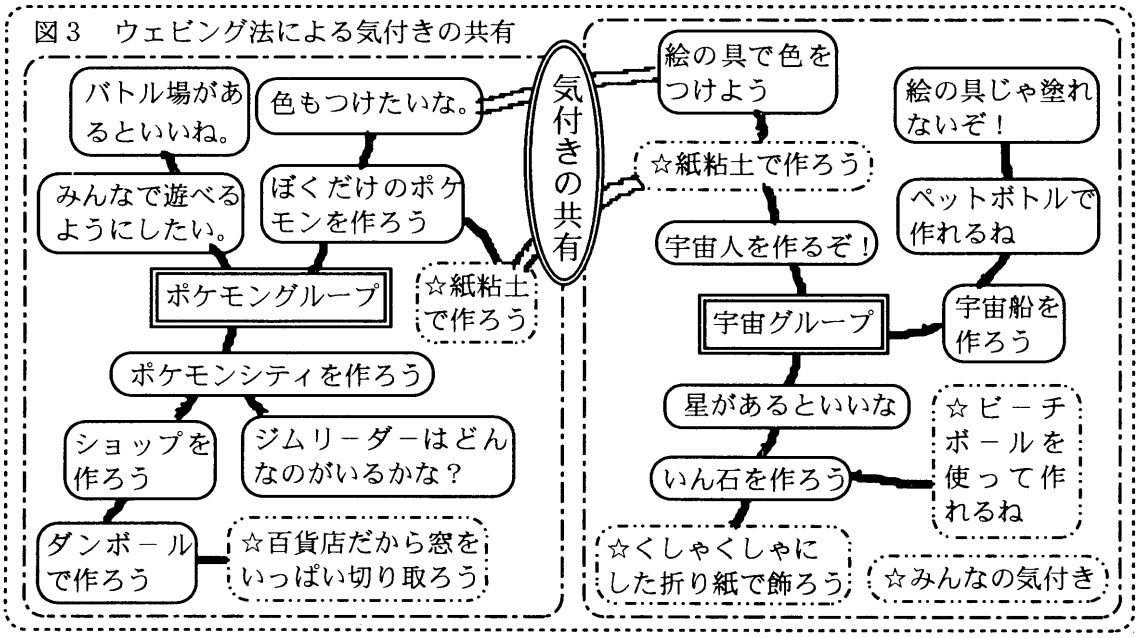
実践例）１年『タイムマシーンに乗って』

この単元では，『生活科だより』を通じて活動内容を毎時間ごとに紹介し，計画表の子供たちの書き込みに，保護者や教師がコメントを書くようにした。それにより保護者も生活科の授業の様子が少しずつ分かってきた。そこで，保護者に活動への参加を呼びかけた。打ち合わせ不足で，始めのうちは手を貸す保護者も見られたが，繰り返し行ううちに，子供が大人の姿から学び取るという趣旨を保護者が理解していった。その結果，「お母さんの作るカゴの作り方がおもしろく，それを見ながら自分でもやってみたらうまくできたのでうれしかった。」という子供の振り返りも見られるようになった。

イ　一人一人の気付きを共有し，互いに広め，高め合える展開の工夫

子供たち一人一人の気付きを全体へと広げていくことは，学校という集団の中で学んでいる子供たちにとって重要な役割を持つ。また，自分とは全く異なる活動を行っていたものの気付きが自分に役立つものであることを知ったり，自分の気付きが友達の役に立ったりしたときの喜びは大きい。そこで，活動によって見つけたり気付いたりしたことを共有することで，見方を広げたり互いに高め合ったりできるようにしたい。そのために子供たちの思いや願いの広がりの様子を常時掲示して視覚的にとらえられるようにするとともに，授業時間内にグループ内で情報交換する場を位置づけるようにした。下図（図３）は，グループごとのウェビング法を利用した子供たちの気付きとそれをもとに気付きの共有を図ったものである。

図３　ウェビング法による気付きの共有



それぞれのグループで行ったウェビング図をグループ内だけでなく全体に広げていくことでグループは異なれども，同じ活動を行っていることに気付いたり，自分たちの疑問に関しての解決方法を他のグループの活動から発見し役立てていくことができたりという姿が見られた。お互いの活動の広がりと気付きが見えてくることで，他のグループともさらに線が繋がりだして，自分たちで気付きを共有化し，高め合うことができるようになるであろう。

3　研究の成果と今後の課題

こだわりを深めていくには活動に愛着を持つこと，そしてそのために素材とふれあう時間や浸る時間を確保していくことが大切であることが分かった。

また，子供たちが気付きを獲得する存在としてかかわれるパートナーの参加や互いの気付きを共有する時間を確保したことで，活動がより活性化した。

今後はさらに，自分の気付きが友達に役に立つ喜びを強く感じられるようにする支援の在り方を考えていきたい。